

CAMPUS KOSEI

キャンパス こうせい

vol.21



平成22年度八戸大学・八戸短期大学 学位記授与式



震災により学校体育館で懸命に応援をする生徒



東日本大震災被災地でボランティア活動

Contents

■ 八戸大学

- ・ 東日本大震災被災地でボランティア活動
- ・ 創立30周年記念誌発行
- ・ 同窓会「南東北支部」「岩手支部」設置にむけて

■ 八戸短期大学

- ・ 平成22年度子どもフェスタに短大生が参加
- ・ 平成22年度就職内定状況

■ 光星学院高等学校専攻科

- ・ 小型移動クレーン講習
- ・ 介護福祉科「事例研究」で学んだこと

■ 光星学院高等学校

- ・ 選抜甲子園
- ・ 新たな女子教育を

■ 光星学院野辺地西高等学校

- ・ 旅立ちそしてスタート
- ・ 全校ボランティア



創立30周年記念誌発行

東日本大震災被災地でボランティア活動

3月11日に発生した東日本大震災の被災地域で八戸大・八戸短大の学生がボランティア活動を行っている。3月31日には八戸市沿岸部の公園2ヶ所において、学生40名が清掃ボランティアを行った。大学の硬式野球部とサッカー部、短大 学生会の学生が中心となり、沼館緑地公園や北沼運動公園でプレハブ小屋の撤去や流木・ガラスの破片などの片付けをし、被害の大きかった北沼運動公園の野球場やテニスコートでは、津波により流されグラウンド内に入った大型タイヤや壊れたベースの撤去、壊れたレーキやライン引きなどグラウンドの整備道具の片付けを行った。

作業終了後、公園を管理する青森県八戸港管理所の担当者より「被災対策で道路・岸壁が優先され公園に手が回らない状況だったため、大変助かりました」とお礼の言葉を頂いた。

また、被災地域への物資の提供として、震災直後には、A重油15キロリットル(120万円相当)を八戸市を通じ青森労災病院などの医療機関へ、今後は学院全体としてマスクの寄贈を教育機関や医療機関に行う予定である他、学生・教職員による物資の提供として、4月には野田村保育所への遊具の寄贈、5月には岩手県立高田高校への図書の寄贈を行う予定である。

この中でも人間健康学部の篠崎准教授は震災以降数度にわたって被災地に行き、介護支援ボランティアを中心に様々な活動を行っている。



介護支援ボランティアに参加して

人間健康学部准教授 篠崎 良勝

東日本大震災から10日ほど経った3月21日から24日まで、岩手県社会福祉協議会の派遣要請を受けて、岩手県宮古市田老地区の特別養護老人ホームに3人のゼミ学生と介護支援ボランティアに参加してきました。

学生を除く参加者は岩手県北地区の特別養護老人ホームで介護の専門職として働いている方たちでした。学生は施設に入居している利用者やデイサービスの利用者とのコミュニケーションを中心とした利用者の心のケアを任されました。今までもゼミ活動で利用者とのコミュニケーション活動は実践してきましたが、利用者自身が被災者であるということも

あり、「話をしたくない」「歌など歌いたくない」「テレビは消してほしい」という利用者の声の中で、学生からは「コミュニケーションがとれない」「ここまでメンタルが落ち込んでいる利用者とのかわりには、私には無理」という声が初日の反省会では出てきました。

そこで、2日目は特別養護老人ホームから歩いて被災地を歩きました。目的は、利用者がどうして学生に「話をしたくない」「歌など歌いたくない」「テレビは消してほしい」と訴えるのかを理解してほしいという思いからです。つまり、利用者の声に真の共感をするためには、利用者が失った街・自宅・家族・思い出を知り、感じる必要があると思ったからです。

そして、本当の意味で利用者に寄り添うケアとは何であるのかを知ってもらえればと思ったからです。その結果、学生は見事に利用者の言葉の重みを理解し、寄り添うケアの一部を実践することができたようです。



介護支援ボランティア参加者(特別養護老人ホーム久慈平荘にて)



八戸大学・八戸短期大学の建学の精神

「神を敬し、人を愛する」

八戸大学・八戸短期大学は、カトリック精神に則る道德教育を施し、高潔なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することを建学の精神とする。

中村理事長が学長を兼務

平成23年4月1日付で中村覺理事長が八戸大学学長を兼務することとなった。前学長の鈴木宏一教授の任期満了に伴



うもので、学長就任に伴い、副学長に丹羽浩正教授（ビジネス学部長）、学長補佐に吉田稔教授（人間健康学部長代行）・遠藤守人教授・大谷真樹教授（総合研究所長）が就任した。

中村学長は就任にあたり、新ビジョンを発表。「地域をキャンパスに、地域に根ざし、地域とともに歩む」大学として、学生へのマンツーマンのな面倒見の良さと自らの意見を堂々とプレゼンできる学生を育成すべく取り組んでいくと表

明した。

昨年30周年を迎えた八戸大学は、今後中村学長のもと、建学の精神に基づいて、地域活性化のコーディネイト役として、「入学して良かった、入学してみたい、在学生・卒業生が誇りを持てる大学」を目指し着実にあゆみを進めることとなる。これまで培ってきた地域に根ざした取り組み、そして新学長のリーダーシップに大学教職員のみならず、地域社会の期待も高まっている。

平成22年度八戸大学・八戸短期大学学位記授与式

平成22年度八戸大学・八戸短期大学学位記授与式が3月23日(水)八戸プラザホテルアーバンホールで挙行された。当初は八戸市公会堂にて開催予定であったが、3月11日の東日本大震災の影響により東



北各地で式典が中止となる中、各関係機関のご協力をいただき、会場を変更して開催することが出来た。

式典では、各学部学科の代表4名に鈴木宏一八戸大学長、蛇口浩敬八戸短期大学長が学位記を授与した。続いて、理事長特別賞など各賞受賞者が紹介された。

八戸大学・八戸短期大学を代表して鈴木宏一八戸大学長の式辞、中村覺理事長の挨拶が述べられた後、卒業生を代表して八戸大学人間健康学部の村井絵里さん、八戸短期大学幼児保育学科の古川華子さんが謝辞を述べた。

その後、卒業記念品の紹介が行われ、最後に学歌と式歌を斉唱し、学位記授与式は終了した。

式典終了後は、卒業生と理事長・学長・教員で記念撮影を行った。会場内各所では教員や学生・保護者が共に記念撮影をし、和やかな雰囲気にも包まれた。

今年度の学位記授与式は、震災の影響を受け卒業生全員が出席することは叶わなかったが、出席した学生や保護者からは卒業を喜ぶ声が聞かれた。出席できなかった卒業生には、後日卒業証書と記念品が送られた。

また、卒業祝賀会については実行委員会による協議の結果、自粛することとなり、開催経費については今回の震災の義援金として寄付することとなった。



八戸大学	理事長特別賞	ビジネス学部ビジネス学科	秋山 翔吾 塩見 貴洋
	学長賞	ビジネス学部ビジネス学科	丹波 亜由美
		人間健康学部人間健康学科	村井 絵理
	優等賞	ビジネス学部ビジネス学科	佐々木 仁望 清水 聖子
村中 優也			
人間健康学部人間健康学科		小泉 朝子 三森 恭平	
八戸短期大学	理事長賞	幼児保育学科	石橋 咲
	学長賞	ライフデザイン学科	松田 聖美
		幼児保育学科	高田 舞由
	全国保育士養成協議会会長賞	ライフデザイン学科	谷崎 淳美
		幼児保育学科	出町 晴佳

同窓生情報交換会を開催

八戸大学同窓会では、大学創立30周年を機に各地域に支部を作るべく準備作業を進めており、同窓生を対象とした「南東北在住同窓生情報交換会」「岩手在住同窓生情報交換会」を、平成23年2月19日と20日、仙台と盛岡で開催しました。仙台で行われた情報交換会には16名、盛

岡には9名が参加しました。

皆さんの近況報告を行いながら、支部設置にむけての情報交換を行い、平成23年度に南東北地区と岩手地区に正式に支部を立ち上げることで合意しました。

今後は、各地区に在住する同窓生（南東北地区は今野幸輝さん、阿部勝雄さん、

高橋大輔さん、岩手地区は門脇輝明さん、晴山一貫さん）を中心に準備作業を進めていくこととなります。

各地域在住の皆さんの支部へのご参加をお待ちしております。



八戸大学創立30周年記念誌 完成

『八戸大学創立30周年記念誌』が完成した。記念誌の発行は、1990年の10周年、2000年の20周年に続いて3度目である。完成した記念誌はA4版、縦書き、160頁。付録のDVDには30周年記念式典の映像、PDFファイルの20周年記念誌と学報（56・57号～）、学歌などが収められている。

平成21（2009）年秋、30周年記念事業の一つとして「記念誌」が刊行されることとなり、間もなく編集委員会が組織され、編集に取りかかったのはその年も暮れであった。

20周年以降の八戸大学には、「商学部」から「ビジネス学部」への名称変更、新学部「人間健康学部」の誕生など大きな動きがあった。記念誌では、この10年の歩みを中心にしながら、一方では八戸大学の歴史を開設準備の頃にまで遡り、また一方では将来への展望が開けるような構成を試みている。

当初の計画では、平成22年10月29日の創立30周年記念式典に合わせて出版する

筈であったが、協議の結果、30周年の記念事業をすべて記録した上で刊行することになった。編集の過程で、予定の128頁（カラー32頁を含む）は160頁にまで増大した。装丁の担当は戸村春樹教授。表紙の題字「八戸大学」は、八戸出身の書家佐々木泰南氏が創立10周年の折に揮毫されたものである。

以前にも指摘されたことではあるが、単に記念誌の編集の為だけではなく、今後も増加の一途を辿るであろう印刷物・関係資料・写真等を収集・整理・保管する専用スペースと担当部署の設置が切に望まれる。

3月11日の大震災の影響はこの記

念誌にも及んだ。製紙工場の被災で「見返し」用紙が間に合わず、印刷もそれだけ遅れたのである。ともあれ今は完成を喜びたい。

（八戸大学創立30周年記念誌
編集委員長 小澤昭夫）



地域産業の活性化を考えるシンポジウム

八戸大学・八戸短期大学 教育・研究・社会貢献後援会と総合研究所主催による「地域産業の活性化を考えるシンポジウム」を2月25日、八戸第2ワシントンホテルにて開催しました。地元企業の方、市民の方や行政関係者など約60名が参加、地域産業活性化への意見交換を行いました。

シンポジウムに先立ち、問題提起として(株)YANA I総合研究所代表取締役社長の 箭内 武 氏が「人間をやる気にさ

せる仕組み—今の仕事に喜びや楽しさを感じていますか—と題し、人の考え方・方法を変えていくことや成功体験に基づいた経験から変わっていくことの大切さを述べました。続いて大谷真樹所長が「八戸の未来のために」と題し、人づくりや起業促進、縦横から斜めのつながりの必要性について述べました。

パネルディスカッションでは、パネラーに、青森県三八地域県民局 局長 堀内芳男 氏、箭内 武 氏、大谷真樹所長、

助言者として八戸工業高等専門学校 校長 井口泰孝 氏をむかえ、コーディネーターの八戸大学ビジネス学部 丹羽浩正学部長の進行により「この時代の変化についてどれだけ知っているか、またこの変化が日々の生活に及ぼす影響、今後の地域の取組み」などについて意見交換しました。

パネラーから「八戸には可能性がたくさんある。ただ経験による成功例だけでは通用しない時代になっている」「教育現場や人づくりの現場にこそ製造物責任（PL）が問われるのではないか」等の発言があり、最後は将来の人材育成のため「未来人材ファンド」をつくるのが重要であるとの結論に達しました。シンポジウム終了後の懇談会では、参加者がパネラーを囲み、意見交換を行い交流を深めました。



「八戸大学」OB&OG訪問 part21



今野幸輝さん
(6回生)

プロフィール

仙台育英学園高校卒、八戸大学6回生。大学卒業後は、建設会社やハウスメーカー勤務を経て、現在今野不動産(仙台市)の専務を勤める。(社)全国賃貸住宅経営協会 宮城県支部長、(財)日本賃貸住宅管理協会 東北ブロック長。

Q：学生時代の思い出を教えてください。

A：サーフィン部での活動が一番の思い出です。八戸工業大学の学生とも協力し、チームチャレンジのイベントを開催しました。東北各地をはじめ湘南からの参加者もありました。サーフンは今でも続けており、今年でサーフィン歴29年になります。当時の仲間とは今でも連絡を取り合う仲です。

Q：様々な肩書きをお持ちですが、日頃仕事をしていて気をつけていることはありますか？

A：「お金に翻弄されない」が座右の銘です。お金があればうまくいく、偉い、と考えてしまうときがありますが、お金がなくてもやれることは沢山あるし、工夫できることもあります。お金は人が作

るのであって、お金が人をつくるのではないと思っています。

Q：在学生へメッセージをどうぞ

A：卒業後様々な経験をさせてもらいましたが、何事にも明るく前向きに取り組むことは大切だと思っています。そして、時には自分をさらけ出し、沢山のひととかかわり持ってほしいと思います。毎年八戸にサーフィンをしに行っています。もし私を見かけたなら声をかけてください。



ミニ・オペレッタ

今年も2月に幼児保育学科2年生が「子どもフェスタ」に参加し、八戸市公会堂でミニ・オペレッタの発表会を実施した。このミニ・オペレッタは、幼児の行う小歌劇という意味で、大人の歌劇と根本的に違う点は、集団と集団の歌の対話により劇が進行して行く総合芸術表現という点である。

保育士を育てる養成校として学生達が自信を持って職場で活躍出来る“技術・能力”を身に付ける事を願って平成14年度



から実施している。

学生達は全てにおいて工夫を凝らし、手作りから仕上げまでの実践活動を行っている。これらが①子供達に受け入れられるか、また、②職場にて胸を張って働けるか、③技術・技能の基礎はこの指導で大丈夫なのか、さらには、④総合芸術

としての専門知識・理解力・認識はあるか等々学生達は検討しながら、身体から漲る表現・演出を模索しつつ実践し発表会した。幸いにも八戸短期大学附属幼稚園をはじめ聖アンナ幼稚園、びわの幼稚園、第二しのみ幼稚園が私どもの力強い実践の場となっており、学生達の行動、表現力に大きな力が加わり、自信に満ちた和がひとつになり力強いエネルギーを発揮することができた。そして、子ども達に受け入れられた達成感・満足感によって、ようやく保育士としての自覚・風格が備わってきたように感じられた。

平成22年度の就職状況ですが、学生の頑張りがあったものの内定率が若干ではあるが、前年度の97%から1%ダウンの96%であった。学科別の状況を見ると、幼児保育学科は、首都圏でまだまだ「売り手市場」で求人が伸びていることや出



就職状況について

足がはやいことを反映し、学生の県外就職の意欲も高かった。その結果、例年同様に高い内定率を残すことができたが、地元の施設等の要望に応えられなかった。学生が県外就職を希望する主な理由は、「親元を離れて自立したい」、「福利厚生が整っている」、「採用条件が良い」などが理由に挙がっていた。一方、ライフデザイン学科は厳選採用に加え不況による求人の減少、東日本大震災の影響が大きく影を落とした。「内定の取り消し」を

含め大変厳しい状況下であったが、学生の頑張りも見逃すことはできない。

平成23年度は、震災等の影響により一層厳しい就職環境が予想されている。職場開拓は勿論、学生の選択肢が広がるよう学内外のセミナーを含め学生の就業力を高めていく支援が必要であると考えている。「インターンシップ」、「ボランティア活動」、「資格取得」など学生が積極的に参加し、ステップアップできるよう支援を就職支援課では考えている。

平成23年度 八戸大学・八戸短期大学入学許可式

平成23年度八戸大学・八戸短期大学入学許可式が4月6日(水)、学生会館におい



て行われ、八戸大学新入学生108名(ビジネス学部49名、人間健康学部59名)と編入学生4名(大学編入学)、八戸短期大学入学生211名(幼児保育学科102名、ライフデザイン学科25名、看護学科84名)の入学が許可され、学生としての第一歩を踏み出した。

式では、八戸大学 中村 覺学長、八戸短期大学 蛇口 浩敬学長の紹介に続き、両学長を代表

して中村 覺学長が「『神を敬し、人を愛する』建学の精神を心に刻み、他地域の若人に負けない、更に他地域の人のためにも行動してみようという心意気で頑張ってください」と挨拶。続いて、大学のカレッジアドバイザー等の紹介、短大のゼミナール担当教員等の紹介および事務職員の紹介を行い、式が終了した。



平成22年度 修了証書授与式

平成22年度の修了証書授与式が、3月11日に美保野キャンパス八戸大学会館にて挙行された。

自動車科第36回生、介護福祉科第18回生が二年間の様々な思いを胸に式に臨んだ。



式では、修了生一人一人に山西校長代行から修了証書が手渡され、「おめでとう」と声をかけられていた。

今年度の受賞者は、理事長賞は介護福祉科の高淵美沙都さん（六戸高校出身）、学校長賞は自動車科の西村慎太郎くん



（光星学院高校出身）であった。

午後からは八戸プラザホテルで祝賀会が行われ、修了生と父母および教職員が和やかに思い出話やエピソードを語りあっていた。

また、介護福祉科修了生による余興や自動車科修了生のカラオケで祝賀会のムードは盛り上がり、そろそろお開きという時間になってあの大地震に見舞われた。

一旦、ホテルの外へ避難し、その後満足に閉会のあいさつもできないままに祝賀会を終えたが、全員が無事であったことが幸いであった。

小型移動式クレーン講習

自動車科では、3月に1年生を対象として、(社)ボイラ・クレーン協会による小型移動式クレーン講習が行われた。

全三日間の日程で、学科講習二日間の後、三日目は実技講習を実施した。



学科講習ではテキストにより「小型移動式クレーンに関する知識」「原動機および電気に関する知識」「運転に必要な力学に関する知識」のほか、ワイヤロープ・運転の合図・労働災害事例・関係法令などを学んだ。

初めて耳にする言葉や数値を覚えなければならないため大変だったようだが、学生は皆、資格取得のため講師の話に真剣に耳を傾けていた。

最終日の実技講習では、3月とはいえまだ寒い中、実際に一人ずつクレーンを操作して荷物を移動させ、目標に下ろす操作方法を身体で覚えることができた。

そして、最後の実技試験では全員合格



することができ、資格を得ることへの達成感・満足感を味わっていた。

今後もこのような資格取得の機会を大事にし、就職へ向けてスキルアップを図っていきたい。

事例研究発表会

介護福祉科2年生は、卒業前に実習施設指導者の参加を得て、「事例研究発表会」を行った。

施設実習で受け持った利用者との関わり方、介護の知識・技術・基本的態度、介護過程の根拠や結果を振り返り、研究形式で文章化するというものである。

私の研究内容は、自己のコミュニケーションを振り返り、今後の課題と向き合うことであった。

非言語サインを勝手解釈したり、自己

や利用者と向き合わずに関わりからも逃げていたため、利用者との信頼関係をつくることができなかったからである。

自己のコミュニケーション時の傾向や感情を分析すると、戸惑いや不安感から逃げ腰となり、接し方や感情が利用者とは向き合っていなかったために多大な苦痛を与えていたことに気付き、相手の言動や非言語サインには疑問を持ち、確認することが重要だと学んだ。

4月から働く際には、今回の研究で学

んだことを思い出し、利用者の非言語サインをよく観察しその意味を考え、疑問を持つなど感性を研ぎ澄ませて、利用者の気持ちに共感できる介護福祉士を目指して努力したいと思う。

（介護福祉科卒業 高淵美沙都）



平成23年度 スタートにあたり

雪解けの春の土の匂いと晴れ晴れとしたそよ風の中で迎える毎年4月の入学式ですが、3月11日の「東日本大震災」の傷跡の癒えぬ今年は、紅白の幕のない体育館で4月7日、404名の新入生を迎えました。教職員においては、前保育福祉科科長の加藤康子先生を新教頭に、さらに昨年度まで八戸市立東中学校校長でありました小野寺實先生を校長補佐としてお迎えしたのをはじめ新たに8名の先生を迎え入れ、74名の教職員と前述の404名の新入生を加えた980名の生徒で今

年度がいつもよりやや静かにスタートしました。今年度は「医療看護進学コース」「女子教育」「自動車5ヶ年教育」の3本柱のスタートの年ではありますが、スタートにあたり改めて大震災で生徒、保護者、教職員誰一人として生命の危険にさらされることなく新たな年度を迎えることができたことに神に感謝せずにはいられません。未曾有のこの国難の期に教育の現場で生きる者として、生徒とともに感謝と勇気、そして希望を強く感じながら、今この時を生きていきたいと思

います。
本校の校舎の玄関ホールに癒しの詩人とよばれた坂村真民氏の直筆の書が大きく飾られております。

『鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ』

光星学院高等学校はどんな時にでも「勇気」と「希望」を失う事のない教育を目指していきたいと思っております。
副校長 橋場 保人

縁を生かす



この春、八戸市立東中学校を定年退職し、縁あってお世話になることになりました。

37年と8ヶ月間、中学校の教師として勤めて来ました。中学時代、悪かった私を3年間受け持って、立て直してくれた恩師のようになりたいと思ったのがきっかけです。できの悪い不良少年でも、夢や目標を持って頑張ることで「人は変わる」、

これが持論です。

25歳からの10年間は大館中で、35歳からの10年間は湊中で「教師道」を鍛えていただきました。その後再び湊中で2年間、そして最後の4年間は東中学校で中学教師を全うすることができました。トータルすると26年間になり、中学校教員生活のほとんどを本校の近隣地区で過ごしたことになります。その意味において、心の故郷ともいえるこの湊高台地区に位置する光星学院高等学校に赴任できた「ご縁」に感謝しております。

私の役目は、本校の力量ある先生方が本校生徒を「力のあるいい男といい女」

に育てあげ、社会貢献する志をもった青年として社会へ送り出す手助けをすることだと認識しております。特に、法官校長先生からのミッションである、女生徒が「いい女」に、そして将来「いい母親」になるよう、部活動や行事を通して「思いやりの心」や「品性豊かな健康美」を育てていこうと思っております。

折しも、東日本大震災で被災した人たちが暮らす避難所へ激励慰問したチアリーディング部と吹奏楽部の温もりあふれる報道に触れ、光星高校生の成長著しい姿に日々感動しております。

長い間、生徒指導と特別活動に軸足を置いてきたことから、「絶対に切らない、捨てない」「NOの理屈より、YESの知恵を！」の2つの信念をもって頑張りたと思います。

校長補佐 小野寺 實

光星学院高等学校女子教育計画が昨年よりスタートしています。教育の一環として、平成23年度は、茶道・いけばな・作法の3つのテーマに、その道のプロフェッショナルの先生方をお招きして、授業を展開していただきます。

本校のめざす女子教育の基本は、気品ある女性の育成です。礼儀作法の身につ



新たな女子教育を

いた女性を育てたいと思います。礼儀とは、「相手を敬い、思いやる心」であり、それをどのように表現するかが作法ですから、学びから思いやりの心も育みたいと思います。

また、この4月から新しい女子の制服を新入生が着用しています。身だしなみに配慮したデザインです。服装は人格を現しますので、制服を正しく着用することが自身を表現することであることを認識して、学校生活で服装に気配りのある生徒であって欲しいと思っています。

また、学校行事としての女子教育では、

テーブルマナーをはじめとして、さまざまな体験を企画しています。本校の生徒として3年間在籍するなかで、社会人として巣立つときに身につけて欲しい事柄を折りに触れて学んでいきます。

新しい時代に即した女性を育成するための本校の女子教育は、日本の伝統文化から受け継がれてきた生活の要を学んでいきます。本校での学びがその後の幸せな生活を築いていく力になりますようにと願っています。

教頭 加藤 康子

選抜甲子園を終え

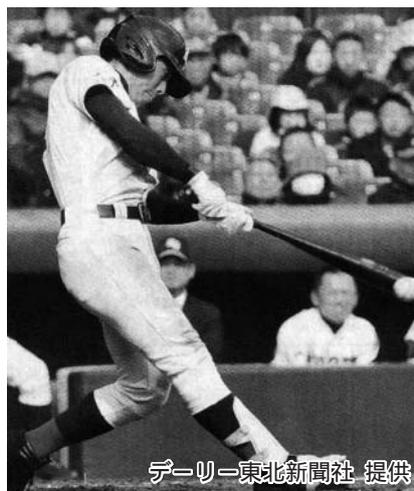
～初の優勝 復興をめざす八戸に届ける～

未曾有の大震災のため開催も危ぶまれた今回の選抜甲子園大会では、本当に様々なことを考えさせられました。厳しい練習に耐えやっとの思いで掴んだ夢の甲子園キップ。選手達には何とかその甲子園で野球をやらせてあげたいという気持ちと、数多くの方が尊い命を落とされ、行方不明の方々も多数いる中で、野球をやっている場合なのかという気持ちで、葛藤しました。震災の影響でキャンプ地の沖縄から直接3月13日に大阪へ入ることになりましたが、開催が正式に発表された18日までは苦しい日々が続きました。



毎日新聞社 提供

正式に選抜の開催が決定してからは、毎日のミーティングでこのような大変な状況でも野球をやらせていただけることに感謝し、全力でプレーすることを誓いました。我々にとっては夢にまで見た甲子園だけでも、震災で命を奪われ夢をみるができなくなった方が多数いるということをおぼろげに忘れてはいけません。だから自分の結果に一喜一憂したり、自分勝手な行動をとることは決して許されることではないのだと言い聞かせました。選手達は心の底から理解してくれ、日々の練習、ホテルでの生活など素晴らしい態度であったと思います。



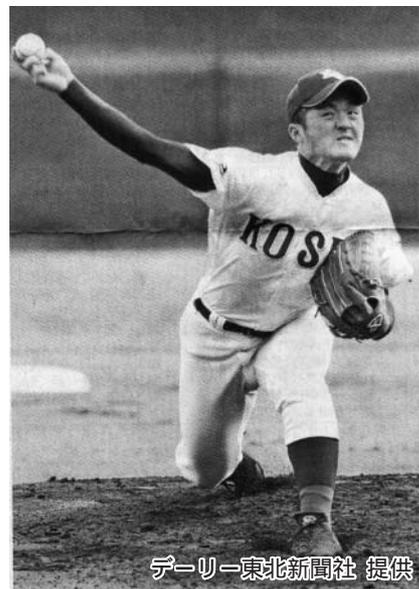
デーリー東北新聞社 提供



その思いが試合でも良い形であらわれ、1回戦の水城高校（茨城）戦では10-0というスコアで勝たせていただくことができました。本校にとっては選抜甲子園5度目の挑戦で初めての勝利でしたので大変うれしい気持ちでいっぱいでした。

震災の影響でアルプスタンドには本校の生徒の姿はありませんでしたが、体育館からおくれた全校応援、附属幼稚園からいただいた千羽鶴は我々に勇気を与えてくれました。本当にありがとうございます。2回戦で智弁和歌山に敗れ、まだまだ全国で勝つには力が足りないことに気づきました。一から精進し直し、また夏に全校生徒皆と甲子園に行きたいと思えます。ご声援、ご協力ありがとうございました。

硬式野球部
監督 仲井 宗基



デーリー東北新聞社 提供



新任教員紹介 ～今年度の抱負を語っていただきました～



下田 香織

4月から、光星学院高等学校でお世話になることになりました。新任早々、保育福祉科1年生の担任をさせて頂く事になり、不安な反面、とてもやりがいを感じています。

今年一年は、私自身も勉強の年だと思っています。生徒達と一緒に楽しみながら色々なことに挑戦していきたいと思います。



西垣 仁貴

バスケットボールに携わり17年、プレイヤーを終えたら教師になりたいと思っていました。高校時代にはどんな事を考え、どんな事に悩み、どんな先生と出会ったか、改めて考えるようになりました。「目標(ゆめ)をもつこと」「目標(ゆめ)を達成するために努力すること」「努力の途中で学ぶこと」。生徒にとって貴重な3年間を、身体を張り、熱意を持って接していきたいと思っています。



橋本 佳代子

この四月から新任教員として勤務することになりました。これまでは民間の企業で働いていたため教育現場は初体験です。まだまだ未熟な私ですが、日々を大切にどんな事でもチャレンジし精進していきたいと思っています。

早く当校の流れに乗れるように尽力したいと思います。宜しくお願いします。



上野 伶江子

八戸大学を卒業して、この就職難の中当校で採用して頂けたこととても嬉しく思います。人数も多く、勉強や部活等様々な面で活躍されている学校なので、生徒も多種多様であるため、多くの経験ができることと思います。他での勤務経験等もないので、四方八方分からないことばかりですが、早く当校の流れに乗れるように尽力したいと思います。宜しくお願いします。

早く当校の流れに乗れるように尽力したいと思います。宜しくお願いします。



平泉 淑子

『So Many Men, So Many Minds.
～世界にひとつだけの出逢いと輝きを～』

多くの出逢いに恵まれてきた私が、2011年春、世界にひとつだけの輝きを秘めた原石が集う学び舎、光星学院高等学校の教壇に立たせて頂く幸せにめぐり逢いました。

「十人十色」の輝きに出逢う毎日、
一瞬も一生の財産に出来る人を、一人でも多く育てたい！
毎日 全力投球の平泉淑子の情熱に ご期待下さい！



川口 喜代子

光星学院高等学校に4月から勤務し、生徒達の勉強への取り組み、部活動の活躍に驚きながら生活している毎日です。

1年生の担任を持たせて頂き、今年と一緒に勉強し頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。



小坂 貴志

初めまして、今年から1年E組の担任をやらせてもらいます、「小坂 貴志(こさか かんし)」と申します。名前は字の通りで「志しを貫いて」生きてほしいという願いで、両親に付けてもらいました。その名前に恥じない様、一生懸命頑張っていきます。どうぞ宜しくお願い致します。



漆澤 謙治

「おはようございます！」
「こんにちは！」
光星学院高校の第一印象は、生徒たちの挨拶の良さ。
私も生徒たちに負けぬようハツラツと元気いっばいに光星学院高校を盛り上げられるよう頑張っていきたいと思っています。

旅立ちそしてスタート

卒業演奏会

毎年行われる人間福祉系列三年生の卒業演奏会が、今年も卒業を一ヶ月後に控えた2月4日(金)に行われた。同系列の在校生、教員など約100名の前で、30名の生徒たちは自分の選んだ曲を演奏した。

本番に備えて昨年9月頃から演奏の練習を始めていた生徒たちは、観客の多さから緊張した様子だったが、全員が最後まで演奏し終えた。

演奏した生徒たちは、「指が震えて、いつもよりうまく弾けなかった」「もっと上手に弾けたはずなのに間違っとも悔しい」と後悔の声が多かったが、顔には満足そうな笑顔を浮かべていた。

卒業演奏会を終えて

人間福祉系列 3年3組 クラス委員長 奥島 航平

平成23年2月4日、人間福祉系列3年生による卒業演奏会が行われました。これはピアノレッスンの集大成であり、一人ひとりが好きな曲を選んで3年間

の学習の成果をみんなの前で発表するというものです。

本番は、緊張のため実力が発揮できなかった人がたくさんいましたが、演奏が止まったり音を弾き間違えても、決して諦めることなく全員が最後まで曲を弾くことが出来ました。卒業後、僕は人前でピアノを演奏することはないと思いますが、「諦めない心」の大切さを忘れずにこの体験を高校生活の良き思い出として心に刻んでおきたいと思います。

3年間指導して下さった先生方、本当にありがとうございました。



卒業式

寒さがまだ残る3月3日(木)午前10時から、野辺地町町長をはじめ多くの来賓、保護者を迎えて、本校体育館において平成22年度卒業証書授与式が執り行われた。

今年度、卒業を迎えた109名の卒業生は、自分の名前が呼ばれると、清々しい返事とともに起立をし、齋藤弘実校長より卒業証書をしっかりと受け取った。

齋藤校長は、式辞の中で「これまで歩んできた道から得られるすべてを正しく

把握、吸収し、失敗することを恐れず、果敢にチャレンジする精神を持ち続け、前向きに臨んでほしい」と生徒を激励した。そして、卒業生を代表して新岡昂貴君が「本校卒業生として、人のために行動したり、だれかのために何かをしたいという思いやりの気持ちを大切に、社会に貢献で

きるよう努力していきます。」と決意を述べた。



入学式

平成23年度入学式が4月8日(金)午前10時から、野辺地町町長をはじめ多数のご来賓、保護者を迎えて本校体育館において行われた。

新入生ひとりひとりの名前が読み上げられ、自分の名前が呼ばれると力強い返事をし、校長から107名の入学が許可された。

齋藤校長は、式辞の中で「フレッシュな気持ちをいつまでも持ち続け、二度と来ない高校生活を悔いのないように過ごしてほしい。また、人を大切にしつつ、感謝が出来る豊かな心と果敢に挑戦し前進しようとする強い精神力を身につけてほしい」と生徒を歓迎した。新入生代表として教養進学系列、4組の櫻庭佑緑さんが、高校生活への力強い決意をこめた宣誓書を元気に読み上げた。



元気いっぱい！スキー教室

1・2学年を対象にした、平成22年度スキー教室が2月25日(金)に、まかど温泉スキー場で行われた。

朝から小雨が降るといふ、スキーを行うにはあまり良くないコンディションでしたが、214名の生徒たちは、インストラクターの指導を熱心に聞いていました。

生徒たちの様子を見ると、中には1年ぶりにスキーをしたので腰が引けていた

という生徒もあり、また、一度もスキーをしたことのない未経験者の生徒は、不慣れながらもインストラクターの真似をしながら一生懸命な表情で滑っていた。

1時間、2時間と時間が経つにつれて、次第に生徒たちの緊張がほぐれ、またコツを掴んだのか、1年前は滑ることができなかった生徒も、今年は滑ることができるようになって、「スキーって楽しい。」

とうれしそうに話しをしていた。

午後の時間帯は、自由滑走を予定していたが、悪天候のために止む無く中止とすることにした。生徒の中には非常に残念がっている者も見られた、思う存分に滑走できなかったものの、今年度のスキー教室も生徒に満足してもらえものとなった。



全 校 ボ ラ ン テ ィ ア

4月23日(土)全校ボランティアが行われた。島田先生の激励の挨拶の後、各学年とも、それぞれの場所へ移動し、約1時間の活動を行った。

1年生は初めてのボランティアで、十府ヶ浦海水浴場の海岸・駐車場等の清掃活動にあたった。海岸には、木やプラス

チックの容器、空き瓶などが流れ着いて、酷い状態の海岸になっていたが、開放的な場所に、爽やかな潮風を受けながら、生徒たちは積極的かつ楽しそうに活動に汗を流した。成果は目に見えてきれいな状態になり、生徒たちにはすがすがしい気持ちと満足感のある表情を浮かべて、

海水浴場を後にした。

2年生も約1時間余り、愛宕公園で実施。始めに、毎年この時期同公園に揚げられる約150匹の鯉のぼりの取り付けを手伝い、その後、公園内のゴミを収集して歩いた。ゴミ拾いを終えた生徒たちは、



自分たちの取り付けした鯉のぼりを見上げながら、「風にたなびいて元気に泳げ」と笑顔で見守っていた。

3年生は、実習棟の雪囲いの撤去とゴミ拾いを行った。冬の大雪で破損した板を片付け、使える板たちは10月まで暫しの眠りに就いた。天候にも恵まれ、曇り空ではあったが活動しやすい気分で、「これはどこへ?」「次は何をすればいいの?」などと積極的に取り組む生徒がとても多く、1時間ほどで作業は終了した。



八戸短期大学附属幼稚園



保護者の皆様からの素敵な贈り物

桜前線が足早に北へ向かい、日に日に緑が濃くなり美しさを増しています。

ご入園、ご進級おめでとうございます。みんなが、それぞれのあしたに向かって新しい一歩を歩み出しました。

まぶしい陽の光と緑の風が、初夏の訪れを感じさせる今日のごときとなりました。

今年の春は、本園にとっても特別な「春」になりました。3月に卒園したお

ともだち、保護者の皆様から、素敵な花壇を卒園記念品として頂戴したからです。昨年度の年長組全員が描いたタイルが飾られた世界でただひとつの、素晴らしい花壇です。チューリップの球根がたくさん植えられ、たくさんの美しく可愛い花が次々と咲きました。ぜひ、多くの皆様にお立ち寄りいただいてご覧いただきたいと思います。

「希望」と「光」が満ちあふれる春真

盛りとなりました。子どもたち一人ひとりが、より豊かな心をもって元気に成長していくために、職員全員が心ひとつにして、日々努めて参ります。これまでと同様、皆様のご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

小さな鳥が 歌っているよ
ぼくらに朝が おとずれたよと
きのうとちがう 朝日がのぼる
川の流れも かがやいている
はじめの一歩 あしたに一歩
今日から
何もかもが 新しい
はじめの一歩 あしたに一歩
勇気を持って大きく 一歩 歩き出せ
「はじめの一歩」 新沢 としひこ



聖アンナ幼稚園

「生命の歴史」を感じる子供たち

子どもは依存した状態から、やがて創造的な自分を創っていくようになります。子どもが探究心から得る様々な出会いは、まるで宇宙の法則のように不思議でも魅力的です。子どもの直感的で好奇心に富んだ心は、身近かな自然との関わりの中で今まで見えなかったものが、そこにあるという事実を発見し、子どもと、

その子どもの感じる不思議との間に存在するものに気づいていくことです。地球を興味深く見るようになり、植物、花、昆虫などその中で命の根源について互いに依存しあうすべてを受け入れられるようになるのです。

年長児ぐらいになると更にそれが顕著になり、地球がどんな風に出来たのか、どんな生き物がいたのか、昔の人間の出現や、地球が誕生してから歴史など科学の心も芽生え、図鑑などで微生物や動植物などお互いの関係など感覚的ではありますが、見たり調べたりするような姿が見られるようになります。

幼稚園では、長い年月をかけて互いに共存している沢山の“自然”に触れていくという過程を踏んだ年長

児にモンテッソーリ教育の全体像としての提供、例えば一年という“時”の紹介や、過去、現在、未来の観念や、歴史の年表の「歴史の中心であるキリスト」、生命の尊厳さを生物の表によって理解する生命の歴史」などを毎年紹介しています。知識としてではなく、こどもの奥に秘めた神秘性のある興味に添えていきたいと思っているからです。幼児期にゆっくりと感じながらも淡々と受け止めていく良い精神性を少しずつ肥やしていく出会いの一つだともっています。



第二しのものめ幼稚園



ものづくりのたのしさ



進級・入園からひとつき。お天気の良い日は園庭のこいのぼりが元気に登園する子どもたちを迎えています。空をゆうゆうと泳ぐこいのぼりのおおらかに遅く育て欲しいと願いながら、年長組では、思い思いの兜を作りました。この時期ならではの作品作りです。かっこいい兜の真ん中には、金太郎です。マジックペンを使いながら顔の表情が豊か



な作品になりました。「みてみて、かわいいでしょ」「こいのぼりも付いているよ」小さい組の子どもたちも「かっこいい」「強そうだな」とたくさん褒めてくれました。さっそく園庭にでて、お父さんこいのぼりを泳がせながら、頭にかぶり兜のみせっこをしました

子どもたちは、「何かに変身したい」という思いを持っています。園内には商品化された道具はほとんどおいてありません。子どもたちは園庭で木の枝を見つけて、あるいはペットボトルを使って、ダンボールを切った紙片、新聞紙等様々な物を使って自分を強くしたり、素敵に変身したりする道具を創っています。もっとたくさん、もっと素敵にの思いをもちながら、そのものに近づいた自分



に満足し嬉しくなり、自信にあふれ、誇らしげな表情をした子どもたちに会うことが楽しみです。自分の思いを伝えることの一つである「ものづくり」の環境を整えながら、楽しさを伝えていきたいと考えています。

びわの幼稚園

びわの幼稚園卒園式

平成23年3月11日(金)午後2時46分にマグニチュード9.0のこれまでに経験したことがない巨大地震が発生。そのため、びわの幼稚園では、3月15日(火)、16日(水)を臨時休園とした。

びわの幼稚園の卒園式は3月17日(木)を予定しており、大規模な余震時の避難、卒園式自体の準備などが間に合うかとても心配されたが、電気、水などのライフラインが確保でき、卒園式後に例年行われている茶話会は簡素化し実施することとした。

15名の卒園児は直前の練習はできなかったものの、担任に誘導され緊張した表情で式場に入場した。それぞれの氏名が読み上げられ、「はい!」という立派な返事に式場は凜とした雰囲気となり、その中で「おうちの人や小学校の先生方のお話をよく聞いて、お友達と仲良くで

きる心の優しい子になってください」と園長の式辞があった。

卒園式が無事終了し、記念写真撮影の準備中に保護者から一言、「卒園式を実

施していただきありがとうございます」と、大震災に負けず保護者と園が一致協力して実施できた心に残る卒園式であった。



届け みんなの願い 心一つに！高らかに！



水城高校戦 ヒットに沸く！



水城高校戦 勝利の瞬間



智弁和歌山高校戦



智弁和歌山高校戦 懸命な応援



附属幼稚園児のかわいい出迎え



帰校した選手をたたえる各部の生徒たち



選手出迎え式 川上キャプテンより挨拶